

中学生のインターネット依存傾向に関する研究 —実態調査と「はまった体験」の聴き取りから—

○坪島佑季 (高知県教育委員会)

小倉正義 (鳴門教育大学)

キーワード：インターネット依存傾向，中学生

問題と目的

総務省情報通信政策研究所 (2016) によると、生活に支障をきたすほどの高いインターネット依存傾向を示す中学生が報告されている。携帯ゲーム機や音楽プレーヤーなどのデジタル機器を用いたインターネット利用の増加から、今後更なるインターネット利用者の若年化が予測されるが、中学生を対象者としたインターネット依存傾向に関する研究は数少ない。そこで本研究では、中学生のインターネット依存傾向の実態をより明確にするために、質問紙調査 (研究Ⅰ) ならびにインタビュー調査 (研究Ⅱ) を行う。

研究Ⅰ：質問紙調査

(1) 目的：中学生のインターネット利用の実態、依存傾向を明らかにする。

(2) 方法：①調査協力者：X 県の公立 Y 中学校に通う中学生 130 名。②質問紙の内容：フェイスシート (年齢、性別)、インターネットの利用機器 (6 項目)、利用目的 (18 項目)、利用時間、Young (1998) の Internet Addiction Test (IAT) を日本語訳した尺度 (長田・上野, 2005) を用いた。

(3) 結果と考察：調査対象者を長田・上野ら (2005) のカットオフポイントを参考にインターネットに依存しているかどうか判断した。その結果、インターネット依存 (IA) 群は 15 名 (14.2%) であった。長田・上野 (2005) は大学生・大学院生を対象としているが、インターネットに依存していると判断された者は 5% 程度であったことと比較すると、時代背景を考慮しても、中学生のインターネット依存の深刻な状況が明らかになった。また、中学生の特徴的なインターネット利用機器として、ゲーム機 ($\chi^2=26.38$, $df=1$, $p<.01$) と音楽プレーヤー ($\chi^2=5.69$, $df=1$, $p<.05$) が挙げられた。経済産業省 (2015) の調査報告に概ね沿った結果となり、個人の所有物を用いたインターネット利用によって、保護者の管理が届き難い可能性が考えられた。

研究Ⅱ：インタビュー調査

(1) 目的：中学生が語るインターネットにはまっていく体験を分析し、中学生のインターネット依存を予防する方法について検討する。

(2) 方法：①調査協力者：研究Ⅰの協力者のうち、協力の申し出のあった者で、保護者にも書面で承諾を得た中学生 5 名であった。②調査手続き：20～30 分のフォーカス・グループ・インタビュー (4 人) と個人インタビューを行い、インターネット利用時の『はまった体験』と『困った体験とその対策』について尋ねた。IC レコーダーから作成した逐語データを、KH Coder (Ver.2.00f; 樋口, 2015) を用いて内容分析を行った。

(3) 結果と考察：『はまった体験』と『困った体験とその対策』に共通する特徴語として「スマートフォン」が抽出され、中学生のインターネット利用及び、インターネット依存傾向へのスマートフォン利用の関連が示唆された。また、共起ネットワーク分析の結果、『はまった体験』では「休日」の長時間利用のカテゴリーとの共起関係が認められた。学校生活や部活動などで平日のインターネットの利用時間が制限され、休日での長時間のインターネット利用となることが考えられ、中学生のインターネット利用には、一気に利用する衝動的な側面があることが推測された。一方、『困った体験とその対策』に関して、親にスマートフォンを預ける・没収されるなどの他律的な刺激によって、インターネット利用時の行動を制限している状況がみられた。このことから、中学生のインターネット依存の予防には、他者による制御が重要な要素であることが示唆された。

まとめと今後の課題

本研究の結果から、中学生のインターネット依存の予防には、保護者や学校関係者など周囲の大人によるサポートが重要であることが改めて示された。今後の課題として、年代による比較や複数校・複数地域での調査を実施すること、インタビューでは、関係性を構築したうえ実施するなど、より自由な発言を聴き取る工夫をすることが挙げられる。